

タイ後期中等教育の日本語教育における 日本語ボランティアの役割と意義

村 野 良 子

要 旨

タイにおける日本語教育は90年代になって後期中等教育に急速に拡大した。それにと
もない教員の不足、教員の日本語能力の不足が問題になっており、日本人のボランティア
教師を派遣してほしいという要望が強い。1999年の夏、筆者は民間国際交流団体の日
本語ボランティア教師派遣プログラムの準備のためタイ国において2週間にわたって調査
を行った。以下タイの日本語教育の特徴を概観した上で、今回調査した高校での日本語教
育の現状と課題を報告し、日本語ボランティアに期待される役割について論じる。さらに
ホームステイと生活の問題について整理し、最後に国際交流という視点から日本語ボラン
ティア派遣プログラムの意義を考える。

キーワード

タイ、後期中等教育、日本語ボランティア、国際交流、ホームステイ

1. はじめに

1999年の夏、筆者は民間国際交流団体の日本語ボランティア教師派遣プログラムの
準備のためタイ国において2週間にわたって調査を行った。以下タイの日本語教育の特徴
を概観した上で、今回調査した高校での日本語教育の現状と課題を報告し、日本語ボラン
ティアに期待される役割について論じる。さらに滞在の形としてのホームステイの課題に
ついて整理し、最後に国際交流という視点から日本語ボランティア派遣プログラムの意義
を考える。

2. タイにおける日本語教育の特徴

タイにおける日本語教育は60年代半ばからタマサート、チュラロンコン大学において
はじまり、バンコク他大学、さらに地方の大学や、教育大学、職業、工業カレッジに広
がった。中等教育機関において日本語教育が始まるのは日本語が高校の外国語選択科目と
なった80年代に入ってからである(内田、1996)。バンコックに国際交流基金の日本語
センター(以下日本語センターとする)が開設されたのは1991年のことであるが、
90年代に入ってからでは中等教育後期で日本語課目を設置する高校が増え、日本語を専攻
できる大学院も創設されるなど、日本語教育をめぐる動きが活発になった。現在タイの日

本語教育は学習者数からみると世界第8位であるが、90年から93年にかけて、機関、学習者数、教師数がほぼ倍増している（国際交流基金日本語国際センター、1995）。タイ経済における日本の経済的な影響力がこの背景にあることはいうまでもない（日本は対タイ最大資本投資国であり、在タイ日系企業は2000にのぼる）。

北村（1996）は近年のタイにおける日本語教育の大きな変化を（1）地域的な広がり、（2）機関と学習者の年齢層の広がり、および（3）日本語教育の内容の多様化（観光、技術などの特定の目的のための日本語教育）の3点に整理している。タイでは日本語は高校1年から第2外国語として、日本語、フランス語、中国語、ドイツ語から選択することができる¹⁾が、90年代から日本語科目を取り入れる高校が増えてきたことから、中等教育後期における日本語教育の場で、教師数の不足、教師の質の向上が緊急の課題となり、日本語センターが教員の養成と研修を行っている（第2回海外日本語教育研究会発表資料、1997）ものの中等教育レベルにおける日本語教育の需要に応じることは難しい。そのため教員不足と経済的な事情から日本人ボランティアを始め教員以外の人々が様々な形で中等教育レベルでの日本語教育に関わり始めている²⁾。

3. タイ後期中等教育機関4校における日本語教育の現状と課題

筆者は日本語教育を行っている4校を訪問し、授業見学と教職員及び行政者との面談を行った。次に4校の日本語教育の現状と日本人ボランティアに対する期待について整理する。

(1) Streewittaya 2 School

この学校は進学校として有名で日本語は1、2年生のみ、約30名が週3回（1時限は50分）日本語を履修している。日本語学習はゴザ敷の特設日本語教室で行う。生徒は靴を脱いで教室にはいり、座布団を敷いて座卓を囲んで座る。教室には日本の写真パネルや日本の小物、手紙や自己紹介などの生徒の作品もかざられている。日本語は選択科目であり、大学受験の準備を目的としないため、文化的側面を重視した日本語教育を行っている。その一環として、日本語履修者だけでなく、全校生徒にむけて、七夕祭りや盆踊りなどの日本の行事の紹介を積極的に行っている。このような行事にはバンコックの日本語センターが用具の貸し出しなどの援助を行っている。

日本語教員は他教科との兼任であることが多いが、Streewittaya 2 School にはタイ人の日本語の専任教員（この教員は英語教師であったが、日本語センターで1年間集中日本語教育を受け、現在も週末に日本語講座を受講している）が1名、日本人助手が1名いる。役割分担はタイ人の教師がカリキュラム作成、授業計画を担当し、授業を行う。日本人助手は副教材の作成、会話テストの試験官などを担当するが、授業は常に2人で行き助手は補佐をする。助手はタイでの滞在経験もあるので、タイ人教師をたてつつ、それとなく日

本語の間違いを訂正したり、教えやすいように教材を作成したりしている。20代前半で年も若く、柔軟な性格で生徒から慕われている。

主教材は国際交流基金の『日本語初歩』のタイ語版を使用し2年間で1-10課まで学習する。ビデオ、オーディオテープなどを始め視聴覚教材や副教材は交流基金から寄贈されたものを使用しているが、これらの教材を中心に教員が絵カード、文字カードなどを作成して使用している。

日本人助手やボランティアには年中行事（ひなまつり、子供の日、七夕、お盆、お正月など）を授業に取り入れるときの補助、歌、映像など若者文化の紹介と教材化、料理、生け花、お茶、盆踊り、書道など日本の伝統的文化と現代日本事情の紹介などが期待されている。

(2) Hor-Wang Nonthaburi School

タイ人教員3名のうち、2名は英語科、1名は社会科との兼任である。日本語を独学し、現在通信教育で学習中の1名以外は、日本語センターの1年間コースを受講後、北浦和の日本語センターで2箇月の研修を受けている。この学校は新設高で3年前から日本語を教え始めたばかりである。

日本語を履修している生徒は高1、高2、高3それぞれ、49、40、33名で、1週間に6時間の授業を受けている。この内大学入学試験のために日本語を選択している生徒が20名ほどいる。カリキュラムにおいては初級を終了することを目標としているが、進度予定に学習者の能力がともなわないため実際にはかなり無理がある。

授業では日本語専用教室と普通教室の両方を使用する。日本語専用教室は、座卓と座布団の寺子屋形式である。教室には鳥居、富士山、日本の伝統文化の展示や掲示があり、正面にタイ、日本両国の国旗と皇太后とタイ王妃の古い写真が飾られている。ビデオデッキ、カセットテープレコーダも常時使用できる状態にある。

主教材は以下の教材である。

1年生1学期	『にほんごあいうえお』タイ日経済技術振興協会 タイの国情に合わせた内容
2学期	『日本語初歩』国際交流基金 L1-5
2年生	『日本語初歩』国際交流基金 L6-22
3年生	『日本語初歩』国際交流基金 L23-34

主教材の他に会話練習のために以下の教材から適宜抜粋して利用している。

副教材	『日本語よろしく』タイ日経済技術振興協会 『入門日本語』アルク水谷教材の堀江によるタイ語版
-----	--

授業は教員が日本語センターで学んだやり方で行われる。ゲームや歌を取り入れ活気が

ある。タイ語の説明部分も多いが、日本語を話させようという工夫と努力が随所にみられる。現在は1年間滞在している日本人の交換留学生在がモデルリーディングなどの補助を行うほか、タイ人生徒の宿題の添削なども手伝っている。タイ人生徒には日本に短期留学した生徒もいるが、全体に積極的に日本語を使おうという雰囲気が感じられる。

日本語ボランティアへの期待は大きく、音楽、ビデオ、テープなどを使った授業やゲームなどの導入、年中行事や祭りなどの紹介など以外に、副教材の作成も期待されている。これはタイ人教員が他教科と兼任であるばかりでなく、学校の業務（広報、渉外など）も職務の一部として行っており、教材作成に時間がとれないことも一因であるが、教師の日本語能力がまだ初級レベルであり、正確さを欠く場合もあるため教材作成に自信がないことにもよる。そのためボランティアには教材や試験問題の日本語のチェック、さらに日々の授業では生徒に正しい日本語の発音のモデルを示すことも期待されている。

(3) Lamphun Chakkamkhanathon School

この高校では2年前に日本語コースを開設した。当時は日本語を担当できる教員がいなかったため日本滞在経験があり日本語運用能力のある女性が非常勤として授業を担当している。言語教育についてはまったく素人であり、カリキュラムや教授法に関する知識もないため教え方に工夫が必要であるという印象をもった。

昨年タイ語担当の教員が1年間日本語センターで日本語教員養成講座を受講し、現在4年生の授業を2時間担当しているが、日本語能力は初級の下程度である。またこの学校は国際交流活動が盛んで、オーストラリアからの交換留學生を始め、日本からも5名の文部省派遣生が在籍しており、見学時には授業に参加していた。

使用教材は4年生は（高校1年）『みんなの日本語』、5年生は『文化日本語初級』であるが、最終学年の6年生は『日本語の基礎』を38課まで学習することになっている。教科書が4年から6年まで異なるのは生徒の日本語力に比べて教科書の進度が早くむずかしすぎると感じた教師が試行錯誤を重ねていることによる。日本語履修者は1学年約40名であり、4年生と5年生が週6時間ずつ、6年生が週8時間の日本語授業を受けている。授業時間数は多いが、この学校の大多数の生徒が第一志望にしている Chiang Mai 大学では日本語を入試科目にしていない。そのため生徒の日本語履修の動機は大学入学のためではなく、近隣に日本企業の工場があり、日本語ができると就職に有利であるからということのようである。

学校では言語教育の専門家を招聘することを希望しているが、ボランティア教師であっても、教授法の知識があり、英語でコミュニケーションすることができる必要がある条件であるとしている。

(4) Chiang Mai Nawaminthrachuthid Payup School

現国王の還暦を祝って12年前に建てられた学校である。今回訪問した学校の中では最も施設が充実しており、学校側の対応も組織的である。学校は中高あわせて生徒数2500名、教員150名である。日本語担当教員は2名で英語との兼担であるが、バンコックの日本語センターで研修し、日本での研修にも参加したことがある。高校では2年生30名が週3時間日本語を学習している。この他1年生約60名の生徒がクラブという形式で日本語を学習している。来年度から中学校でも日本語を始める計画がある。生徒の日本語学習に対する要望は非常に強く、学校当局も力を入れている。11月からはユニバーサル（日本では新世界という団体）からボランティア教員が派遣される予定であるが、日本人教員を雇用する予算がないため、このような形式の援助は歓迎されており、ボランティア教員には、学校側が積極的にホームステイ先の提供や送迎などの便宜をはかっている。

使用教材は『にほんごあいうえお』泰日経済技術振興協会、『にほんごよろしく』泰日経済技術振興協会、を中心に教員が副教材を作成して使用している。

日本人ボランティアには、正しい発音を示す、本に書かれた言葉以外の日常語（普通体の話言葉）の紹介と練習、日本の生活、文化、習慣、年中行事、祭りの紹介（料理、おりがみ、盆踊り）などを行うことが期待されている。

4. ホームステイと生活の課題

今回筆者に調査を依頼した民間国際交流団体はボランティアが旅費と研修費用を自己負担し、滞在費用を現地の受入家庭が負担するという形式を考えている。そのため今回の調査では大人がホームステイをする場合の問題を体験的に探ることがもう一つの目的だった。筆者は4つの家庭にホームステイしたが、経済的に豊かな1軒を除いて、3軒とも教員の家族であり、タイの中流程度の家庭である。

どの家も標準的な日本の家よりは敷地も家も大きく、個室の確保はむずかしくない。住に関わる問題としては、タイ式トイレの使いかた、水浴びの方法などを含む水周りの習慣、清潔感覚の違いについて十分説明する必要があるようだ。例えば、4軒ともシャワーからお湯は出なかった。冷水で洗髪し、自然乾燥するというやり方が一般的なようだったが、慣れないと体調を崩すおそれがある。また冷房がない家のほうが多いが、家が大きく、風が通ることから、それほど蒸し暑さを感じなかった。むしろ車やオフィスでの冷房のきき過ぎのほうが筆者には耐えがたいと感じられた。調節可能な衣服を持つていく必要がある。

食については、衛生感覚に文化的な差を感じた。タイでは屋台などがいたるところに見られ、屋台で食事を買うこと、買ってきたものを自宅で皿に盛り付けることも一般的である。このような場合、タイ人にはなんでもない食べ物で日本人が下痢を起こすことも多い。暑い国だけに生水や生ものに対する注意が必要である。またタイでは料理は大皿に盛られ

たものを各自が自分のスプーンで取ったり、自分のスプーンで他の人に取りわけたりすることが正しいマナーであるが、これも日本人の衛生感覚にはなじめない習慣であると感じた。タイは食材の豊富なところであり、独特の辛みが嫌いでなければ、おいしく食べられるが、人によってはこの味を全く受け付けないという人もいるので、食になじめない場合は長期の滞在は難しいだろう。

生活時間の違いにも注意が必要であろう。タイの学校の朝は早い。5時から6時に起きて、冷水で水浴び、洗髪して、バスや乗り合いタクシー、バイクなどで7時には登校というパターンが一般的である。通学時間が1時間に及ぶという生徒もいる。筆者も生徒と同様に登校した。いつ、どこで朝食をとるかということも個々人で異なるようで、高校の食堂は朝からずっと開いていて、朝食に登校してから取る教員や生徒に食事を提供している。教員室でも空き時間に適当に食事や間食をすることが普通で、生徒も教員も常時食堂などを利用しているようであった。

上記以外の一般的注意事項としては、感染や狂犬病に注意が必要である。都会では排気ガス汚染が深刻であるが、一方田舎では、蚊などが媒介する伝染病や風土病がないわけではない。長期滞在の場合は、気持よく生活するために予防接種などをしておいたほうが安心である。

5. 日本語ボランティア派遣プロジェクトの課題

今回の調査で日本人の日本語ボランティアに対する期待が大きいこと、現地では働きやすい環境と現地家庭滞在の便宜の提供が期待できることが明らかになった。以下課題3点について整理する。

(1) 派遣期間とボランティアの資質

派遣時期は当初2、3か月というのが日本側の提案であったが、受け入れ側としては、慣れるための期間を含めて、少なくとも6か月から1年程度の滞在を希望している。

ボランティアの年齢について派遣側が主婦層や中高年を考えていたのに対して、受け入れ学校側は生徒の年齢に近い20代の若者が適当ではないかと考えている。

健康が保証されれば様々な年齢層がいることはよいだろう。交換プログラムなどでそれぞれの得意分野を他の学校で紹介することもできる。日本の状況を考えると、ボランティアをする時間的余裕があり、派遣の費用を負担できる経済的余裕がある年齢層は中高年であろう。しかしタイの高校生にとって最も身近な日本は「ちびまる子ちゃん」「どらえもん」を始めとするアニメ、「キティ」「X-JAPAN」などである。日本語学習に対する動機づけという点からも生徒と共感できる若いボランティアの参加も大切であろう。

(2) 事前研修

日本語ボランティアに期待されていることを整理すると日本事情、若者文化、伝統文化

などの紹介とタイ人教員の日本語と教育方法の補助が中心である。受け入れ側の期待に応えるために、日本語教育についての一般的な知識とともに日本紹介や教室活動についての知識と紹介方法を具体的に研修することが必要であろう。

さらに生活面の研修も忘れてはならない。日本語ボランティアはタイの家庭に滞在することになるので、タイ文化や生活習慣についての理解と異文化の中で生活する心構えを事前研修の中で体験を通して学ぶことができるようにすることが欠かせない。

(3) 国際交流という視点からみた日本語ボランティア派遣プロジェクト

国際交流の推進という派遣団体の目的から考えると、日本語ボランティアを「安上がり
の教員」という形でタイ側に捉えさせてはならない。そこには相互の学習の存在が必要である。今回の調査では、ボランティアに対して、タイ文化（言語、料理、音楽、マッサージなど）の学習を始め、希望すれば僧院での修業研修にも参加できるようにする、また他の学校との間でボランティア教員の短期交換プログラムを実施するなどの提案が出された。さらに学校の枠をこえて、行事や文化の紹介を通して、またホームステイを軸に、地域との交流を図ることができれば相互の学習の機会を一層豊かにすることができるだろう。

注

- 1) タイの教育制度は6－3－3制で、小学校1年から高校3年まで英語が必修科目である。
- 2) 日本語教員を必要とする機関に日本人ボランティアを派遣する団体が複数存在する。謝礼の有無は機関によって異なる。有給の場合はタイの基準である。この他に国際交流基金が派遣する日本語教育専門家、現地採用の日本人、日本に滞在経験のあるタイ人などが日本語指導にあたっている。

参考文献

- 三原 嘉子 「タイの高校における日本語ボランティアについての体験報告」『日本語教育の交差点で－今田滋子先生退官記念論文集－』溪水社、p.244－250、1999.
- 佐久間勝彦 「海外で教える日本語教師をめぐる現状と課題－タイでの聞き取り調査結果を中心に－」『事情報告編世界の日本語教育』第5号国際交流基金日本語国際センター、p.79－107、1999.
- 古川和人・湯山佳代 「後期中等日本語教育の量的拡大傾向に関する事例研究－タイ王国における経済・社会的背景との関連性についての一考察」『事情報告編世界の日本語教育』第5号国際交流基金日本語国際センター、p.203－214、1999.
- 北村 武士 「タイ国における日本語学習経験者の日本語使用状況」『日本語国際センター紀要』第4号、国際交流基金日本語国際センター、p.109－124、1998.

- 北村 武士 「タイにおける日本語教育」『事情報告編世界の日本語教育』第4号国際交流基金日本語国際センター、p13-27、1998.
- 小坂昌子・篠原智代 「タイにおける日本語教育の概要」第2回海外日本語教育研究会資料、国際交流基金日本語国際センター、1997.
- 内田 裕 「タイの日本語教育事情」『海外就職'97日本語を考える』アルク、p67-71、1996.
- Kanlayanee Sitasuwan 「1992年を中心とするタイの日本語教育」『事情報告編世界の日本語教育』第1号国際交流基金日本語国際センター、p63-169、1994.
- 生田 守 「バンコック日本語センターにおける教員研修プログラムの開発」『世界の日本語教育』2、国際交流基金日本語国際センター、p.77-94、1993.